



服部應賀著

驕まごう

人ひと

必かならず

慄ふる

竹屋たけや

定價三錢五厘



日四月五年七治明許官

在下

人

間

萬

事

中

用上

老おこる

々むら

客きやくの馬うまをを鹿か

その中なかにに持もつてを

福ふくをを人ひとにに与あたへる

驕まご人う必かならず慄おそ筐かご

○ 旁言

肝部應賀著

夫おの憂うれ患うれ小こ生な者ものハ安やす樂しあ小こ終おるまとあるま古いにし人へののこと諭こと言を廣く

大おほるまるまるまかか實じつ小こ貴たか賤しずとと由よし小こ儉けんをを忘わすれる奢せ小こ潜ひそ上か

者ものハいうま子こ孫そのの榮さかをを見みととつつんんささてて由よし茲こゝ小こ大おほ

都みやこ會あひのの大おほ道みち小こ峨が々々ととるま大おほ盤ばん石いしのの高たか山さんふふいいとと

出い現げんせせりり然しかるる小こ凡たゞ人ひとのの眼めみみるる愚ぐ蒙もうのの雲くもききりり

覆かひひ是こゝをを見みこことといいつつてていいふふががゆゆへへ其その景けい采さいををいいふふををめめくく

國中の山を何由登る小勞しく下る小安き是れ由
此山ハそまお反て登る小安きと平地を行ぐ如
しまた下る小難ことさあがら 劔山小の平ふ如く
ふまお既小古語小由儉より奢小を入安く奢
より儉小の入ぐさししあるに知べし扱此山出
現の来曆を尋まお當今府下の兆民男女を
こらと比奢小長ト殊小中人以下の奢を限に
十倍をるがゆへ其惡念の微塵積て終小此大山
とあり天下の大道を妨むお此山を名づけて大者山

と由又潜上が嶽と由り小此麓より絶頂までの商業
と見まお怪々たる茶店揚弓の類ハ具負進上と
印せし暖簾の下小新造年間立並んで声音振
つくるお田夫野人を見てもお休るまおか掛るまおと腰
と加免て遊樂人の懐を開くまおらうといへども其得る
金の半ハ湯屋と髪結小持運べ日々小勤定合て
錢足びの生活あり又艶く嘿々たる倭洋両店兼ね
割烹家と見まお二階坐敷小昼夜の強歌恬然るる
び。みんるまおまおの屋七兵工が饗應小角力おんくら古

めけども残截頭の壁人の半髪の晒落の土瓶より水
走虎のお化で褒をどきど古郷の妻の糸をしる遠邦五
九郎のお容様方千脚万来と祝しお出る内儀の空笑
ひ小の城のかりうふふ盃を傾け忽サツクの月給殿より
新貨の花びらを一坐へ降き天上ぬけの快樂五衰
りどおと叔此山第一の権郭の諸人滅亡する名所
るりしが過年牛馬の算を御解放の大功徳小うつく
庄司甚右工門が魂も永き獄縛を免きて開化の美
政を拜まへし前条女の業の中元歴々の娘もゆる

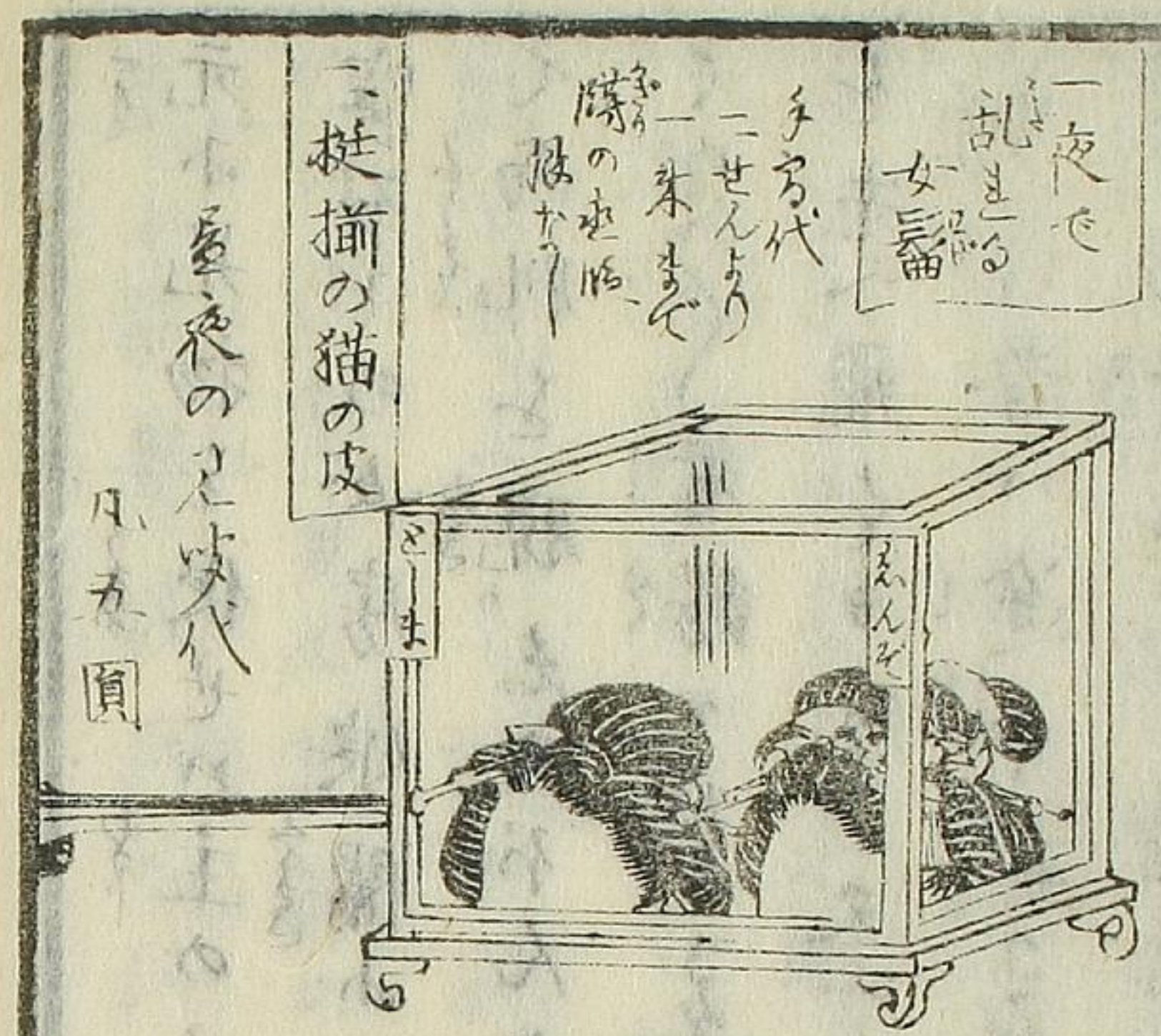
と聞かまきりゆり其親の活計の為るるまき古語小仁
君由用無臣の養難しとあまど由維新以来永年
不勤の臣小由普く家録をとらるる而已なり身
自由を得きしむるは是寛大の御慈憐あまは篤と
勘辨の上正業小原づくさきりあるる小左いなく
我手足を勞せば雲を爪すりたる商法ふかきこと
資本も心を失ふも當然るれ又悪弊の者の身の自
由をゆりしむるしと取あやまりて暇ふあうしと同輩を
透引又まきりしむるる小由吞翌日由吞喰ふかゆ小終小

究迫して落魄是非なく娘を賣う又ハ些少の債ある
春夏の腰掛へ出して酒茶の合手とする是を開化
の活計杯と自負する何ぞや前条の業ハ卑賤
まゝ必死の場を助うるといふ深く忌憚るもの
あるハ士の身としてかゝる賤業ハかゝめて子の名を
一生活汚るるとして親として子と愛する道ハ鳥
獸を見よ。誠ハ親の奢の債と子が贖うと其顔
の白きを見て其親の心の黒きを志る者なり又此
峯ハ歌舞妓所々にあつて此番附過々搗々の

元小見物を促せば主の苦勞ハ露不ともかりの人のつゆ
寝不の女房娘闇小起て化粧の寒をあへ
て両肌を脱。志や不んや。香水やら踊りる合鏡
でめい。着飾がでさるるや合乗の人力車より魂
を先へ飛をもつり又一兩二分の駒下駄を憑虚は
歩行者ハ途中小つづの凸凹あまば道普請の
るさを誇れども道のころさをたゞ是を勞するのミ
るるハ此山ハ登る者ハ手足ごころ終ふる身を
亡るるも志せば昔或人我家を忘て隣の家ハたの

大者山 潜上嶽
客隨見買
贅品直段附

日の入 辛月



一夜で
乱まる
女鬚

多分代
二せんより
一朱まで
隣の遊ば
はかり

二挺揃の猫の皮

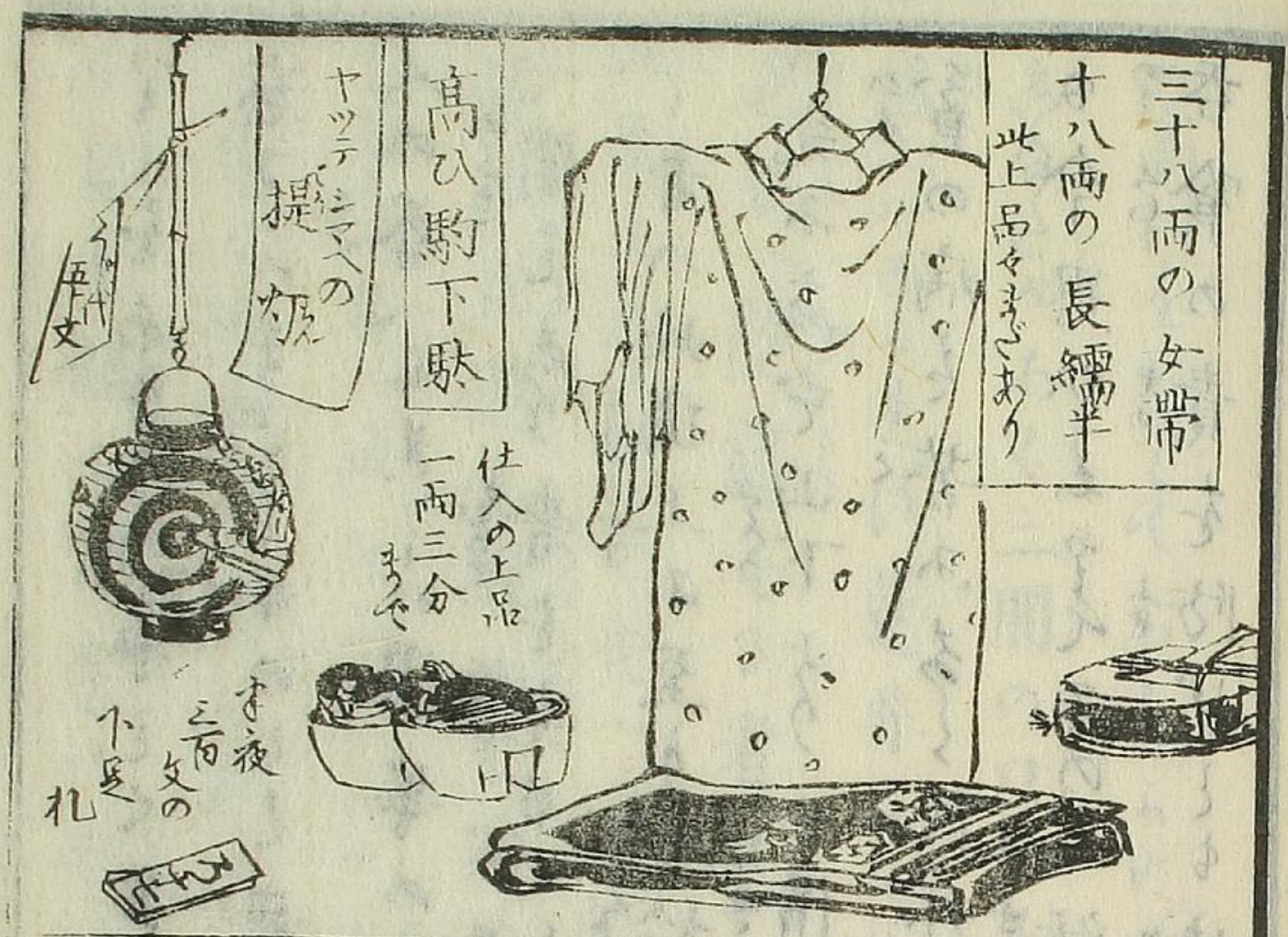
屋敷の二つ代

凡五圓

金ある
藝者
人魚



金ある
金の鱗



三十八両の女帯
十八両の長縹半
此上品々々あり

高ひ駒下駄

仕入の上品
一兩三分
まで

ヤツテ
提灯

今夜
三百文の
下駄
札

親の
腰



女膝小丸

世車上手の
お茶屋のかま

笑ひ賃
二百疋
六百疋
まで



五

四

つらさをあまりの事として是を聖人へまことけしむる家を
忘るるはまごころのこと我身を忘るる人ぞありと聖
人の答へらまごころの渠等の人をのりまごころも燈消
へ闇をあり奢を究めて負を去るるの如く此山へ登り
者ハ此頂上へ至りて始て目々覺るといふも後悔
ハ先へ立む山下よりハ借財思ふ責来らまごころ日頃を
負の病も苦みまごころ以外の病のまごころと諷ひ
由今思ひまごころの三絃探見臺より質種といふ
呑喰の責を防げとも焼石へ水も溜らば二西で一分

の高利をかた右をふせげば左へ燃立あると立札ハ
あるとあく二間の口へ九尺の障子で居ゆいれれ
後へハゆくまごころ是非多く此山の絶頂より一方の負
之谷へ墮落する者日々多し此墮落人を見まごころ
バ見よ今見世先へ身代限の札を下又重代の家
蔵を立退く親族へ同居する者或ハ鼻僕日傭
とある者ハ此だらく人が半ありまごころ是等の前車
を見て後車の禁へ若此山の半途へ登る者ハ早
く身を顧て質素の平地へ下べり昔孟子ハ孟子と

育そそる時住かきしよ所あそびを撰えらんで遂つひに聖人せいじんとなるを今此府下を見みるふ繁はげ花はな町まちハ勿論もちろん場ば末すえの端はし々々もむゆく奢あはれが行い届とどきて其日ひ稼かせの油汗あぶらあせをその女房にようぼう娘むすめが頭あたまにく先まへまでく不費ついでして長屋ながや中ちゆうの先達まへだちとなり穂ほ和わの少女せうじよを同行どうぎやうふ。昼ひるハかゝるの物見ものみ遣や参まゐ。夜よるハあの寄席よせあの縁日えんじつと二人透引たうりんへは五人ごにんとり五人ごにん翌日あしたハ十人じゆにんと次第しだいふ増まえは篤誠とくじやうの親おやひとへは子こを育そそつふふは町まちを尋たずつふとゆかそらくな。田夫でんぷ織女おりのも常とこふ鹿食ろくじき粗版そばんあて身骨みほねを勞らうし作り製せいまは米穀まいこく衣類いり

と同一おな人間にんげんの渠みち等らが為ために坐ま喰くをさまつふよりゆむと喰くの身みとありて一生いしやう樂たのしらむを理きりとて終はに都會とくわいふまり集あつふ時ときは是こゝ飢渴けいこく國こくの基もととあらんとし或ある有志ゆうしの者もの三人さんにん報國ほうこくの為ため會議ぎぎふ及びて先ま一人ひとからふ此山こゝふ潜上ひそかにありし男女おとこの頭あたまを刺さりて其毛そのけを以もつて大毛おほいけ網あみを造つくり夫おつとと山やまの腰こしふくりて人ひとありしゆは北國きたこくへ引移ひきうつて北海ほくかいの埋洲うみしゆうとまる時ときハ無用むいようハ有用ゆうようとまるのとまるは悪わる弊へいも跡あとふ残のこらぬ後人ごにんの見みせしめふ是こゝぞうとしりの又またその手段しゆげん甚難しんなんハ此山こゝハ庶人しよにんの身み々々と錯さくふ凝固ねいこ

まろく 岩石ありき 鋤鋤の及ぶりのありて孫を西洋流
あて 大炮を打うけ 微塵とまらうか手軽しとていふまこと
御両君の發明感トけりか 仰吾國を神國るまは神
の御末の人間の事の善悪と申へ訴て然る人況や
報國誠忠の獻言いふを納受のありてまきと發言をれ
ハ小田原雀の千声此鶴の一声不感伏し夫より三
心一致して都會の鎮守を祈りてまらうか都會鎮守の
明神は是ま心やまひがとさ女子小人の懦弱我々の
願望も聞はらまらんと聞おれん己の笏を投りんとま

まひし折る開明誠心の獻言ありて捨おまがと速
堅不託宜を下しとまらうか此都會ハ諸神の氏子
多く寄留して入あめは全國の神くへ此趣意を述べ
諸縣の神慮を入札あて受取。其第一の善法とりて
諸人の禁戒を示さんと忝あく由神筆を添まらうか
是入札の筐を添使者神を以て諸國の神社へ持
廻しめらるひしが其筐今日社前不當着まらうか今ふ由
諸人のびつくりまらうか轉心杖はまらうか早く
正路不立ちうると此神託の答を免とまらうか其使神の噂

と聞ふ子として親の稼とせと盗者ハ人喰島へやうとやら又勤つとめ我
せは小禄ちりと取りゆくとして居る者ハ真綿まわた心首こゝろとてしめり
又親として子小教へかく毎日買喰の錢ぜいとやる者ハ先祖せんぞの墓場
ふ於て石塔せきとう責ふあふしゆの又我手小髪かみの結むすぬ女にと裁縫ざいほうのこ
ぬ女に其手へ喰物くものを持せぬよ此こする秘密ひみつをか先まへよりこ神へ
して甚まことど恐入れども未いまか目あはからぬ方かたとして同おなく皇國こうこく小生せう
ありせに同おなく米こめとて御縁ごゑんの口くちとぞ憚おそるこば不ふ皆みな様方さまかたの
為ためと思ひてびらう箱はこと開ひらぬうち小極内こごくうちの吐はき也なり他國たこくへ他言たごんハ
かく御無用了

吃く敬馬かうま懲ちやう面めん箱はこ

嘯言 服部應賀著

夫それ世上せうじやうに天災てんさいのあむ時ときを何事なにことおとらば天あまうあむこば其前そのまへ
表ひらをあむせえ人民じんみんを加護かごあるこハ富士浅間ふじあさまの破裂はくはくを
るこふ其前日そのまへひふ天地震動ちんどうをこば其邊そのへの者ものハをまこと
あつて其場そのばを早く立退たちひきが更さら其難がたをまぬるこ此こ前
表ひらを知しるこ頭太づかみ因循いんじゆんする者ものも其天災そのてんさいをまぬれ
ば此外そのほか雷らいの霆たまくこふ雨風あめかぜと電かみなりが先まへへあむこ春はるのあむ

其の梅がさる秋のちるせふ虫が鳴火の臭きと煙が出
 て其禍の先をちるる。爾ら炭や粟の列るる。其
 ちるるをたといそんが刻炭を一種るる。其りら
 ちるる栗の及るも其焼仕方をちるる。此難ふあふ
 者の其前表を知て其場を退ぬ者ふひと扱人身日用
 の業ふ此ちるる。のりつる。公務の進退不時刻
 此ちるるあり車馬の走ふ掛声あり幕を明るふ口上り
 蒸車の出るふ笛とふと角力ふ太鞆開帳ふ立札賣始
 不引札浮雲場へ繩を張る皆其ちるる。其中小世上

の妨と人身不害ある業の難有也 政府より其条を前
 以て御法度不達しあふ夫と守らふ懲役罰金の患ある
 又親の子ふむらうて成人の上をちるる。手習学文家業
 教る時不習ひ熟さば一世の活計とある。のち兎角浮薄
 の心より身と亡む者多し譬へ 政府の命令親の異
 見るくとも世の中の善と悪とい誰も弁へあるとちる
 る。其の悪を慎む他の為でもなく我身の為ふちるるを
 知て是を犯さ何れぞや誠不近年諸人の諸業其
 根を枯しと稍ふ茂る奢を積で山とちる 天下の大道を

竹本



古人の發へお
 主家の主人へいつて
 竹本ははるるを
 拂ひせるとさる
 主を主人の家のと
 加主といはせり
 主の才あからぬ
 物のとらふが
 主かたのまふ家の
 主後へるとさるぞあ
 いくつせぬとまふが



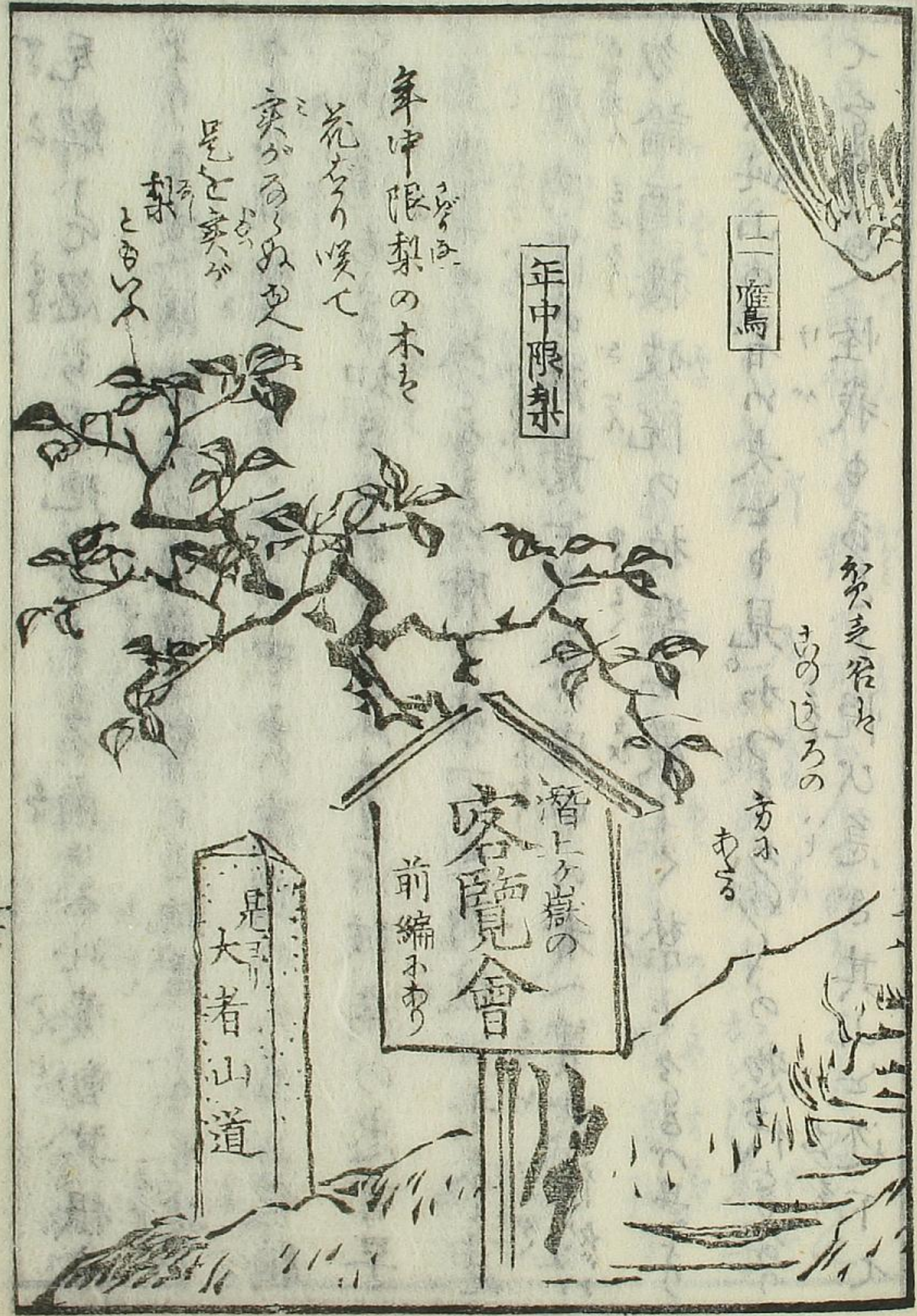
主の才あからぬ
 物のとらふが
 主かたのまふ家の
 主後へるとさるぞあ
 いくつせぬとまふが

妨まがぐるり客年きやくねん五月其景采あきまを述のて其山やまに潜ひそ込こる
兄弟あに姉妹いまい必かならず神罰かみばちのまじりあつを觀みまが恐おそ多おほく
其未ま發たれ神託かみたくの密意ひそいを漏はれ其危難あやむをまぬれ
させり免ゆるんとせしに夫おつとを納いれざると箸しりん千引ちびきの名なを
打うたりあらむが獨ひとり戦々せんせん兢々きんきんとて薄うすき氷こほりをふりて
ごとくお天上てんじやうを視みひ此こ前ぜん編あみ誌しするを全國ぜんこく府縣ふけんの氏うぢ
神かみより邪曲よこしま決議けつぎを入い札しやくせし其その筐かみふ心こころ目めを付つていと
つつか吾われ産神うぶかみの寬大あまのひろある仁慮おんじよの深ふかさふ涕泣なみする
とありを是こゝとの人ひとを彼か入い札しやくの筐かみ吾われ護神ごかみの御手ごてに

歸かへり直ただふ蓋かきを開ひきき断然だんぜんのとなれども
雨あめをまがら此山こゝの者ものの目め前ぜん大小だいせう小こびつつりること
遁にまがるがも普通ふつうの親おやのこ子こ不ふ便べんのゆま
をのりあるが況いはや大都會たいとくわいの中なかに幾いく万まん人にんといふが氏子うぢこ
と持もつた産神うぶかみおましませば渠等うれらが為ために正直しやうじきの御心ごこころ
を曲まらしめて其その事ことを聞くふ日ひを延のびし山上やまの上の業わざ躰たゝみを
遥とほ覧らんあらん何卒なんぞ轉まね先ま杖つゑをつつき早はやく此山こゝと下くだる
者ものあらふ其身そのみの為ため且かつ國くにのとめと御ご猶豫うゑうよありしるが
成者なりも一人ひとりもなく日々山上やまの上まる者もののこゝろまが斯かくの

慈憐いとかなふ當あたらばとて其蓋かさ二百日御猶豫おぼろの限かぎりに
及び彼神代かみよの手力雄たぢぢの尊ととが天の岩戸を投なりひ
く奮ふん然ぜんと筐かまのふとを閉とりて是このつらふ筐の中よ
り賣買堅固いんこ贅業ぜいご禁止しん驕奢きやうしや消滅しょうめつの神札しんせき累々るい
と奮ふん翻はんまるることをふしぎるは此時このときの大者おほし山やま隠かくれ
ゆるさ大商おほしやう自みづかり此神このかみ憂うれふ恟おこり仰天あうてんと云我
或時あるとき家僕けやくふ命いのち下くだり竹たけあつり雪ゆきを拂はらせざるに其
命いのち下くだり主ぬしへいからば其雪そのゆき拂はらふ者ものふのことかはははが今いまの
夫おとこ反かへり我家僕わがけやくといふと一ひと己こ心こころふ手てを延のびて他家たがへ

の雪ゆきをそとらるゝが其雪そのゆき我身わがみおかるゝといふとも是等これら
の主ぬしと稱なづけ身みあひ遁にへるゝとるゝ其元そのもとといふ
我わがは山やまお登のぼり智ちと顧かへり今いまにつくぐ此山このやま誰たれも
身みを破やぶることをなすことをなすこと何卒なにとぞ此山このやま一統いつとうの大小おほしの
難むづかし我身わがみお引ひけ後車ごぐるまの誠まことお今いま茲こゝお覆おほりて
余人ほかの人と無事むじお下山くだりをなすことは是こゝ天下てんかへの忠ちゆうともるゝ
んと夫おとこより恐縮おそしやく汗顔あせお天あまを拜をがりて一身いつしんお一山いつさんの者
の惣代そうだいを祈願いのねしけしむ其忠そのちゆう言ことおまゝにまて件けんの神
札せき悉ことごとく一東いつとうおまゝとありて此商人このしやうじんの家うちに墜おちけしむ立所たてどころお



年中限梨

年中限梨の木も

花をり候て
実がるゝぬ更
是と実が

梨と名ふ

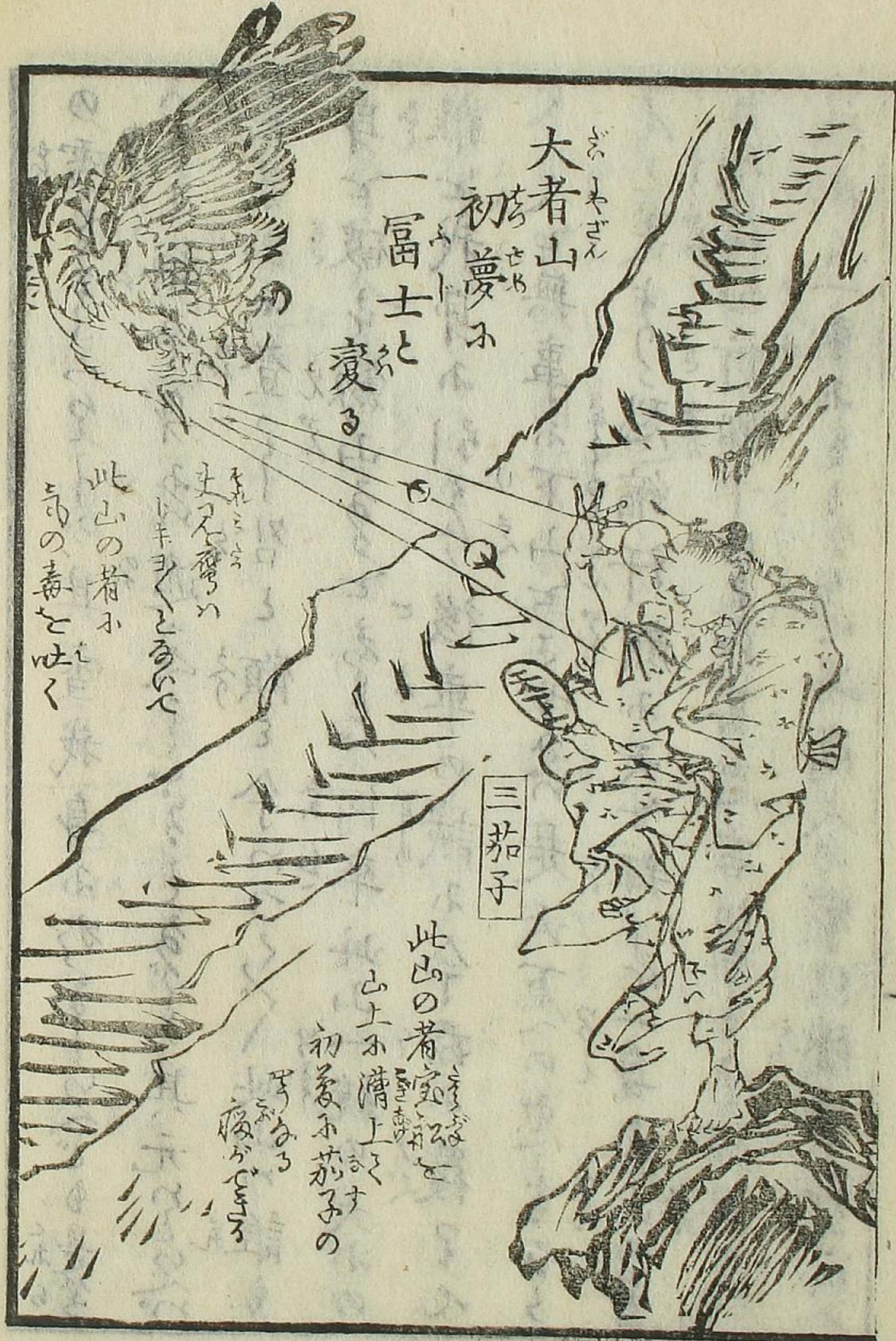
一鷹

梨之谷と
名のほろの

方小
ある

潜上ヶ嶽の
密覽會
前編あり

是
大者山道



大者山

初夢

一富士と

寝る

三茄子

此山の者小
鳥の毒を吐く

此山の者
山上に潜上りて
初夢小茄子の
寝る

瓦解して忽ち平地とどるる雨ふ此變動其根本
より遠國諸縣の腹藏不響くと地震より甚し
多し此響不當者の中あり遠國の火車不我
と灼傷ある如きありとのみさるる彼商の忠言早
くも後車の誠とあるが府下第一の大商彼と手本と
二度陶笛の注意とあるが店中の者へ質素儉約の
勿論酒樓妓院の遊樂を嚴しく禁ト々まば是より
先ふ此山の者ハ夫と見。かつきめいくの惣代も有り
てさういへ怪我も有きと悦び急ぎ其山を逃下て

彼商を身護神と拜て可らんりのをさるるく
彼と反てさるるく不誇り己が頭の蠅をかへば最早
びりり篋の蓋もあいてあまふ跡を野宮高砂と
平氣の平左衛門で新年と待とのみ。あつる此山
の遊藝ハ古来より正月元日の休めて二日より初日
此例あり一が明まで今年一月一日より
朝旨奉戴の学校を諸方とも七日まで休学
ありた此山の遊藝を古来とありあて一月一日よ
るさるつくどんの人とせお客も又どんくの大入るれば

是これがら何いづれの蕎麥屋そばや也又夜中忙いそしく天狗連てんぐづの
天ぬらそはお口を之たせ花巻なままきをう風邪人かぜびとの鼻はなの
先ま々ま味あじと辛からく一玉子ひとたまごをめめめをとりて君の僕がく
のと揖讓いさざうまろろろよけとと平坐あざとかいて嗟来さらいといひ
そと人間あひたもづ一合の酒いっがふも二百五十文を樂たのしむと謡うたへが
そをやの主あやを口くち鞆ふふがボンとくと調子てうしとありせ。その
おのしこ蕎麥粉そばこなおはらるてどろく年の晦日くろひをば
まぐか入りて願ねがふか年玉としたまと七色の唐からがらお宝船たからぶねと添そて
出でせば宝船たからぶねも七色なないろとの七福神ななふくじんの縁起えんぎもよと出でる

おの入り船ふねあり此外このほか都つて此山このやまの者ものの登のぼりしのこと好この
諸人しよじん宝船たからぶねと此山このやまの絶頂たつとへ漕こ上あて夢ゆめもま有頂天うてんてん
樂らくと願ねがひけしら七福神ななふくじんも惘あはれた衆議しゆぎとやめ。一神ひとがみ一夜ひとよお
渠みち等らお授たまふ福ふくと考かんがへらるて七日ななひまで初夢はつゆめの見みえしか
今日けふ八日やっぴつ此山このやまの者ものの初夢はつゆめお我われ大者山おほおほやま忽然と富士山ふじさん
お衰おとろり其頂上そのたかより夫見鷹それとみととら荒鷹あらいと飛出とてままま
と啼な。遠土とほつちの鳥とりが日本にっぽんの土地とちへ渡わたりてくお此この藪やぶ葉は
人ひとへ氣きの毒どくを吐はきけし七草ななぐさ薺なの効きもあるて其毒そのどく
とらまち額ひたいの上うへお茄子なすのやうるる瘤うぶとみまま皆みな一ひと同

小仰天こあうてん七福神しちふくじんさる由よし聞きへませぬらんいちふた一富士いちふじ二鷹馬にたかば三
茄子なすあり船ふねと山やまへもあげぬりをと額ぬかを撫なでて泣顔なみかほ
とかくま心こころのちろろいさい千代未聞せんごのこゝろの芝居しばと浄苗理じやうめうり
軍談ぐんたん嘶家すゐけ音曲おんきよく指南さうなん妓樓ぎろう二ヶ所ふたヶ所四宿よっしゆくの茶屋市ちややち
街待合まちまちあひの茶屋ちややもても老末らうま堅固けんこの世よもつるも成
よろ痛いたよああの論草ろんそう猶なほつるもさる

下巻に終る

吃驚くわくきやう懲面ちやうめん箱上はこがみ

懲面ちやうめん於お被ひ函はこ

○ 傍言はうげん 服部ふくべ應賀おうが著しやう

抑世上おさうじやう大者山だいしやざんの始はじめて出現しゆげんせし先蹤せんそうを尋たづねるも今いまを去さ
こゝに凡およ二百年にひゃくにゃくねんの昔むかし延宝年間えんぽうねんかん小此山ここのやま始はじめてつるもれ粵えつ
小潜上こせんじやうをるも者もの甚おそろど多おほき中ちゆう小其抽こそのひきたるも江戶えどの住人ぢゆうじん
石川六兵衛いしかわろくべゑの夫婦ふうふあり此者こゝのもの牽頭けんとう末社すえしやを先達せんたつや
してああの山やまの主ぬしはおれひひりりと花奢はなしや風流ふうりゆうをあんじ
るも小此時ここのとき又また上方かみかた小同山こどうやま出現しゆげんしはるも東あづま西さい相あひ

互不自國の山の自負慢言より遂に東西確執
して山争とあるも可笑此争は普通の山林を
地方官へ出訴して裁判を仰ぐ其高低の確定
をいへども是は地理の度量計を以てするべき山に
あつねば六兵衛外國人の金星見物への入費は及ぶ
るが無益の大金を抛て女房の衣服を新調し
黒羽重小南天の立木を染させ下着は京の緋を奪ふ
江戸紫に山水天狗の小模様をそのまをまて髪飾
より一切身不附もの小心を尽して京都見物と披露

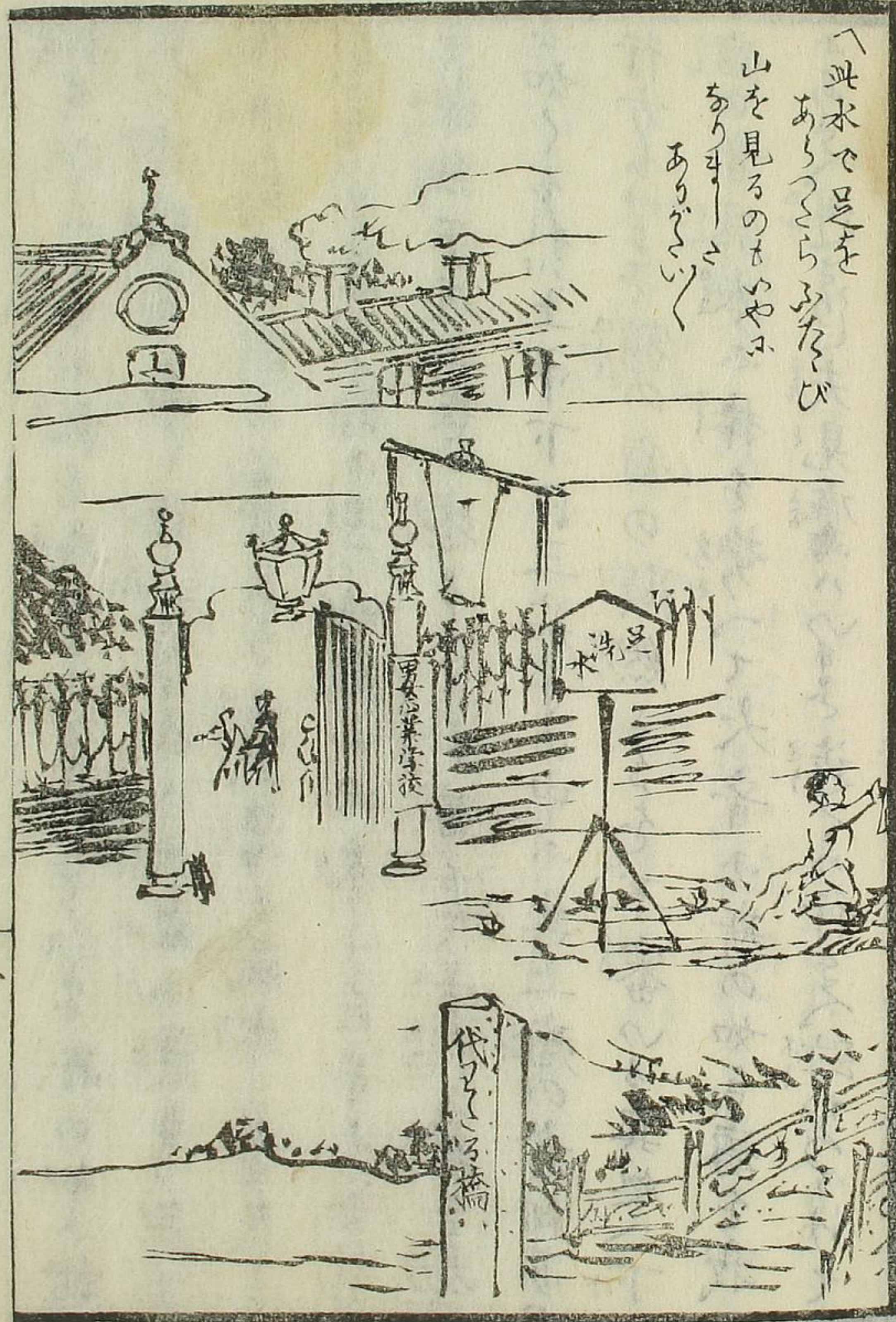
を志けども内心ハ此衣裳を以て西方の潜上ヶ嶽
と張倒しんとし信心組なれば密にそのつれやをく此
噂をやくも西方不聞へるが西方の又同氣を求む
る難波屋十左衛門の女房當時大者山の大総督が
おバ一山の者小夫を私語を東方まで京の名物緋
を嫌て江戸紫でお出まりあるはひらも江戸の名
物紫をきつてあんなよせんと何うねえ緋縹子小
ひくと浴中の名所を悉く細画不縫せ是を以て
東方の女敵小眼小見きんと唇の色子を光りあや

うせや山上不待あま入けるかえや石川の女房浴中を
見物たるを聞よりイデごきんをけ襟をかひつるひ棲を
とつて志ありてうごとと同ト道筋を退進ちて共衣裳
を競ふさまはさあざう廓中の遊女が初春小仲の丁
をめぐるが如し是を又女の相撲小見立る時ハ東江戸
むらさき西京画の子よふへきう雨も十日目の閑
と閑との立姿を見物たる數万人何の方が勝らん
と其評判を待てる波花屋の衣裳ハ所がうとつ燃た
つむりの花やうきた見物のうちよりこちの内儀をひそ

んちや東のお方見ともあひあきかてれくと罵がゆへ終小
京の方へ團扇のあがりけが又見物の中より此二人の
衣裳を見ゆる亭主の鼻毛の寸尺を胸のうちで計も
つりしと然るに利勘の土地をねば石川の着たる南天
の實ハ悉く古渡の珊瑚珠の玉ゆく其價千金の余
あるを見付し者あきハ再び東の方小團扇を揚て
其時の樂首小○石川やなごか姿小負ふれと世小此人
の金ハ尽すドとゆふを石川聞て鼻の先を愛宕山よ
り高くして箱根山を平地の如く小駕小て飛せ戻りけ

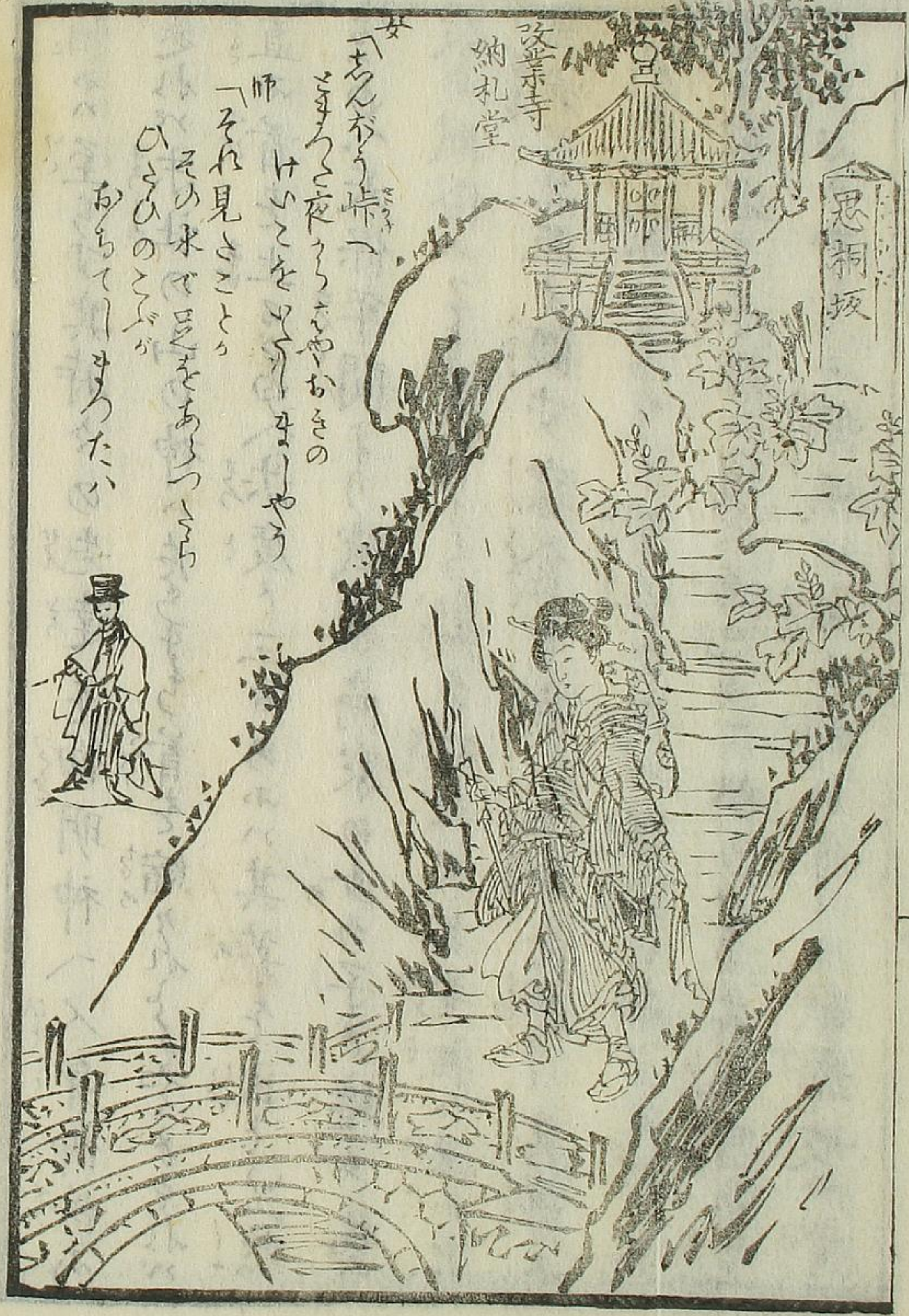
るか此時既小將軍綱吉公の治世始ふあこれ天道盈
を缺忿筐の蓋茲小始て開き第一番小石川の凡轉国
へ於拂箱の遺放とあり其外此山の者の奢を尽せし
帯刀を普く召上らひて衣服の制禁嚴ふありて諸人
も忿仰天して吾がち小山上より之げおちて平地とい
ありけるが西方の山ハ次第小僧立るふ是と又天和年
中稻葉丹後守正通諸司代の時不当て瓦餅一貞
享年中不至てハ景も并も消るが夫より又十年二十年
目ハ大平の土龍奢の土を持上て山とるせよ必慄

拍ハ至らず其時々先達を佃明神へ人身御供ハ
送ねバ末社の山の神ハたちまち首を縮れとやもせしバ
直ハ首を上るがゆへ法度と三日めハ其芽を出と以然
るがゆへ天保年間より武家商家の女の子も遊女藝
妓の風俗ハるるより自ら髪を結ハ又其先祖ハ且不出
て夕の生死ハ顧ず寐食を忘て血力を提し其効ハ
よつて一家を存せよ質朴の代ハ榮花の夢も見び其
効ハ家名を子孫ハ殘ハ而已めて終りける其末孫の主
ハ血刀のかりハ銀紙の刀を閃めりて歌舞妓の聲



へ此水で足を
 あらうつらふたぐい
 山を見るのたやふ
 ありまー
 ありまー

頼付ん原



女
 へあん布う時
 夜うらたやかきの
 師 けいことをし
 へそれ見さこと
 その水で足をあらうつら
 ひまのこが
 あらうつらたは

上号
石を
名ふ
あり
あり
や
する

似をつふと治不^ち乱^らを忘^{わす}れざる心かけあるべきが斯^{かく}の如^{ごと}き諸^{しよ}
民^{たみ}の遊^{あそ}憐^れより高^{たか}く積^つ上^あたる今^{いま}の大^{おほ}者^{もの}山^{やま}是^{こゝ}あり然^{しか}る
不^な疾^{やま}びつくり箱^{はこ}の蓋^{ふた}あり夫^{それ}見^み鷹^{たか}も飛^と出^でてトキヨク
をちらせるため小^こ目^めの上^{うへ}の丹^に瘤^ぶも出^で来^きたる昔^{むかし}とちがつて
其^{その}根^ね強^かて此^{こゝ}上^{うへ}卷^ま不^な述^{じゆ}たるごとく箸^{しよ}めて千^ち引^ひの石^{いし}を打^う
が如^{ごと}くをれ上^{うへ}中^{ちゆう}下^げの三^{さん}加^か子^しの中^{ちゆう}小^{せう}其^{その}上^{うへ}瘤^ぶの者^{もの}初^{はつ}夢^む
行^い方^{かた}をけし額^{ひたい}の瘤^ぶの顯^し然^{ぜん}たるを不^ふ審^{しん}ゆる其^{その}処^{ところ}へ下^{くだ}
瘤^ぶの者^{もの}鉢^{はち}巻^ま不^な棒^{ぼう}を携^{たづ}へて大^{おほ}音^ね不^な斯^かの如^{ごと}き瘤^ぶを我^{われ}
不^なあへ^へ進^{すす}さり夫^{それ}見^み鷹^{たか}ハ^ハと遠^{とほ}くハ行^いき入^い跡^{あと}ちつちけて

さうしやとま^まり^りを^を上^{うへ}瘤^ぶハツと手^てをあぐねがそとへん
る脊^せを踏^ふへ一^{いつ}何^{なに}も^も松^{まつ}前^{まへ}鉄^{てつ}之^の助^{すけ}カ鼠^{ねず}をふまへ^へ如^{ごと}
まねど弁^{べん}慶^{けい}縞^{こう}の廣^{ひろ}袖^{そで}と額^{ひたい}の瘤^ぶハ頭^{こゝろ}巾^{きん}小^{せう}見^みゆ^ゆお
安^{やす}宅^{たく}のせりふ出^でると思^{おも}へば「遠^{とほ}く^くん^んの^の聲^{こゑ}不^な聞^きけ近^{ちか}くハ
よめて此^{こゝ}瘤^ぶを取^と取^と医^い者^{しや}あ^あ大^{おほ}願^{がん}成^{じやう}就^{じゆ}褒^ほ義^ぎの金^{かね}ハ望^{のぞ}次^じ
弟^{にい}と呼^よぶ是^{こゝ}方^{かた}不^な聲^{こゑ}高^{たか}く其^{その}医^い者^{しや}是^{こゝ}不^な何^{なに}りと突^つ袖^{そで}で
ひま^まつる歩^あ行^い来^きて兩^{りゆう}人^{にん}を上^{うへ}下^げ小^{せう}又^{また}け其^{その}中^{ちゆう}不^な居^いりて
上^{うへ}中^{ちゆう}下^げの瘤^ぶを見^みて云^い「僕^{わが}医^い方^{かた}大^{おほ}贅^{ぜい}論^{ろん}を聞^きせ^せ」小^{せう}時^{とき}
鳥^{とり}の吐^は血^ちハ蜀^{しよく}魂^{こん}の錦^{きん}を以^もて拭^ぬぐ立^た処^{ところ}不^な落^おるといふ

夫見鷹の氣乃毒の瘤ハいろは短歌不圖を見るの事
其外一医書不治方をけきと是れ正しく年の始ふこと
悦之痛をねがふ今より鏗ふを頂くべし先今日ハ是切と
幕をさるおけも何をも又遊藝師茶屋の娘の中不痛
を見て親不むうひ近ごろ子供達不正業を習せし為
御上りて年々大金を學校へ費し多く遊業人ハ一錢
と下さぬ上此やうな痛ができ又皇后様より女
子へ女の食業を覺させんと是も又大金を施行
せしむる一と女の業を學で親を養ひたきかしてか

其親おぶりをさして何がよいとて身が樂で金の儲る活計
が此外不あるものとバ「イ」ぞ此痛ハよせし印のこぶ
「む」をい夫を志すよよの印の瘤ゆへ其上三ツ四ツと痛
を殖してこれると責むば其望を逃さぬ娘も何り又貸望
敷の息子のよ他の息子が我家つとて根不大金を費
ししハ福の神のやうに悦ぶと我子が其如くさる時ハ貧
乏神の如く不吐れ他の親子も自親子も心ハ同トもの
を於他の害不ある渡世ハ身の為不あるめと苦ハ言
葉を奠つめて親不吞たる此者等ハ千人の中不一人

ふりあれ此山ハ威ありしがお氣の毒をこふ此程又此
山ハ七ツの不思議ありけり又用心のよふ其七ふ
一ギをお聞せもうを第一小瀧取の神社より毎月鬼少
お被箱を持って山をめぐる。第二地獄谷の葱草が一時
不枯る。第三小三葉園の女郎花春歸花を開けども帰
花ハ本季のさそでいり。第四懐手の士貧乏谷へ落命
も。第五親の脛鼓を迎ひの船向島ハ見ゆ。第六限り
梨小蟻がついて實が始てある。梨小ありがついてさあぬが限り
右の之弟七山上の火氣是ハ破裂の前表をば此

さるるあへん何れ土石の下不埋らるるどんか島へ吹飛
さるる此二ツのうらハ道がゆ人永代安心の地へ一人の
手を取て直様道案内を致せば皆様も後か付てお出る
まなや是雲山の麓ある遊業上人の足洗水。子づ
此池で泥と足を洗へば痛もこゆる。是うら幸抱峠と
いふところ。平人ハ此峠を苦あはせめが大者山の落
人衆ハ骨の折る難処あるが是を越バ夫うら安心の
町へ出るが其町ハ義食や美服を賣家ハ一軒と
あり其かうらハ一生盡く石もあると平地の町ハ佳

懲面於被函終

うらみは是を近しくする人を互に敵とおもふがよし。
 此先本を附添てあげたる事ごとくさうハ躰がつづりぬゆへ
 此峠の立場を別小雲助さう酒手をおねさるるを業
 内者茶代を拂て大まか世話お茶をあげるとて暇
 小いしん何ハ鬼と何と云ふを来ハ山ヶ崩てもぬ安心で
 おめでたし

小説三箱 驕人びつくり筐
 懲面於被函